

# 千利狸の呟き

数年前に市長、行政担当者にワクチンの説明をする機会があり、ワクチン後進国である日本の現状と、自治体からの任意接種助成拡充の必要性について説明した。終了後年配の行政担当者の方が手を上げ「ワクチン接種を進めて何かあったら責任はどうするのか？」と質問があった。「すでにワクチン接種しないことで、この地域でも合併症に罹った子が多数発生している。行政担当者として接種推進してこなかった責任をどう考えるのか！」とビシッと反論できればよかったが、何と返答したか覚えていないが、ごによごによと答えたことだけ覚えている。その後、K先生が手を挙げ「ゼロリスクはありえないことを理解すべき」と反論し、理解されたようだった。行政は目先のリスク回避には目がいくものの、より重要なリスク回避に盲目的姿勢に愕然とするとともに、医師会から行政への情報発信が重要と感じた。

ゼロリスク探求症候群とは2001年のBSE騒動で提唱され「ある問題の小さなリスクを完全にゼロにすることを求める一方で、他にあるより大きなリスクに注意を払わなくなる病的心理」を指す。「もし何かあったらどうするのか？」にフォーカスして議論するとき、このゼロリスクへの姿勢が大きく関与する。

公園の遊具も、「もし子どもが怪我をしたらどうするのか？」という懸念で撤去されるのもその一例。リスクをゼロにするというのは、元来ほぼ不可能であることに加え、リスクをゼロにしようとする対策が犠牲にするものには注目しない。遊具で子どもが遊び、ときに怪我をすることで得ている経験や知恵など、言語化しづらくも大切なものが考慮されないことは、結局子どもたちの不利益になる。

初めて実施されるmRNAコロナワクチンも安全性にゼロリスクはありえない。感染重症化リスクの高い高齢者なら議論にならないが、軽症例ばかりだった若年者が接種に迷うのは理解できる。ただ変異株による若年者の重症化が報告されてい

## ～ゼロリスク探求症候群～

### Risk狸

る。「もし何かあったら」は接種後の状況を想定しているが、接種せず「もし何かあったら」という状況の想定は薄い。客観的事実に基づき、どちらのリスクを許容するかの決断になる。

ゼロリスク探求症候群の安全を求める行動は非難できないし、しばしば正義を主張する。結局はリスクの大小問わず、ゼロリスクを探求すること自体が非現実的で、どちらのリスクを許容するかの決断となる。

日本の政治家（特に野党の）のゼロリスク探求症候群は重篤である。小さなミスが発覚すれば毎回「責任をとって辞任」と騒ぐことがどれだけ国益を損なっているか。建設的な対案も提出せず、同じミスがブーメランとなっても無視する政党に投票する人たちの気がしれない。与党もゼロリスク探求症候群(疑)で、毅然とした決断はできず、問題先送りが続いた結果が今の失われた30年に繋がっている。医師会だって増大する国民医療費に対し診療点数アップを叫ぶだけでなく、リスクを許容する有効な削減策を提言すべき。未来の子供の負担増をどう考えているのかはなほ疑問である。

日本のGDPが中国に越されたのが2010年で、中国のGDPはすでに日本の3倍に達し、一方日本のGDPは1995年以降ずっと横ばいのまま。1人あたりのGDP順位も日本は現在30位と下降傾向で、数年前に韓国に越された。日本政治のゼロリスク探求症候群化が解決しなければ、未来に視点をのけた政治の実現は困難で、日本は引き続き時間を失うばかり。子供たちに明るい未来をプレゼントするのに必要なのはゼロリスクの追求でなく、許容すべき目先のリスクを大人が率先して受け入れることであり、その時間的猶予はほとんどない気がする。